特集にあたって

［特集担当］DIC㈱
重廣龍矢

近年，新型コロナウイルス（COVID-19）や環境／サステナビリティ対応など地球規模で世の中が目まぐるしく変化しています。新型コロナウィルスは先進国を中心にワクチン接種が進んでいますが，各国・各地域で従来型から変異型への置き換えが急速に進むなど，まだ完全収束の兆しが見えません。環境／サステナビリティ対応に関しては世界的に強烈な脱炭素の流れがあり，今年4月に開催された気候変動に関する首脳会議（サミット）では，各国が2030～2050年に向けた温暖化ガスの排出削減目標を相次いで打ち出しました。日本も2030年46％減（2013年比）という削減目標を掲げ，これまでの26％減とした目標を大幅に引き上げることになります。また，脱炭素はエネルギー問題とも切り離すことはできません。とくに日本は火力発電，とりわけ二酸化炭素の排出量が多い石炭火力に依存している現状（発電電力の内，全体の約3割（2019年））があり，エネルギー政策の変革が求められています。また，これらは経済のみならずわれわれの生活様式にまで多大な影響を与えています。たとえば，新型コロナウィルス関連では，テレワークやリモート会議の増加や東京オリンピックなどの無観客開催等が，サステナビリティ関連では，レジ袋有料化（2020年7月～）やリサイクル促進を指向した廃棄物回収システムの整備等が挙げられます。さらに今後，ガソリン車などの石油製品に対する規制がかかることも予測されます。

これらの大きな社会動向の変化の中，色材や界面制御に関する研究においても少なからず適応が求められています。そこで本誌では小特集企画として，「色材や界面制御に関する今後の動向」と題し，最先端で活躍されるフロントランナーの方々にインタビューを行い，今後の研究および社会動向などに関するお考えを本年9月号より不定期の連載形式で紹介していきたいと思います。これは本誌としても新しい試みとなります。ぜひこの記事をもとに「色材や界面制御の過去～未来」に関して思いをめぐらせ，議論してみてはいかがでしょうか？